
モンスターハンター 《異能な狩人》

エアライド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 『異能な狩人』

【Zコード】

Z9900W

【作者名】

Hアライド

【あらすじ】

半年に一度のハンター試験。その試験に参加すべく沢山の新人達で会場内は賑わっていた。その中にひときわ闘志を燃やす者が一人。そんな彼には特別な力が宿っていた。

この物語はそんな彼が仲間たちと困難なクエストをこなしながら立派なハンターに成長していくお話である。

これは、作者の初めての作品です。

Part 1 (前書き)

どーも初めまして！！エアライドです。
私は小説なんて一度も書いたことのない素人ですが頑張って書いて
いこうと思っています。

? ? ? side

季節は春と夏のちょうど入れ替わりの頃。

ここはユクモ村。今日は半年に一度のハンター試験の日だ。会場となつた訓練場では沢山の新人ハンター達が試験の開始を待つていた。

? ? ? 『よし！ 今回が初めてだけど一発で合格してやる…』

彼の名前はウォン。この春にハンターになつたばかりの新人ハンターである。彼は物覚えが良く、ほんの2ヶ月で無理なくジャギィーを1回のクエストで30匹も倒せるまで成長していた。そんな彼を訓練場の教官が見て今回の試験に彼を勧めて、そして彼は受けることにきめた。

ウォン『早く始まんないかな・・・・・・ん？』

そんな彼が試験ねの開始を待ちながら会場内を見回してみると、彼の斜め前に彼と同じぐらいの年齢の少年が何かそわそわしながら立っていた。よく見ると足が細かく震えているようだ。気になったウォンはそんな彼に少しづつ近づいていった。

ウォン side out

Part 1 (後書き)

ご一でしたでしょうか？満足してくださった方やそうでない方もいらっしゃるかもしれませんと思いますので、『いい、いいかったほう』がいいよ』など

の感想をお待ちしています。

・・・上記に感想を待つてますと書きましたが、私、不定期に感想をチェックしますので、すぐに返事をすることができません。すみません。

また、投稿も不定期です。本当にすみません。

Part 2 (前書き)

勉強の合間に投稿しています。

Part 2

? ? ? side

? ? ? 『ああ・・・緊張する。』

今、そこでそわそわしている少年、彼の名前はタオ。彼も春からハンターになつたばかりの新人だ。彼は普通の人より気弱な為、とてもなく緊張していた。そう、周りに気がいかないまでに。そのため彼は・・・背後から近づいて来るある一人の人物に気づかなかつた・・・（某名探偵風ww）

タオ『うう・・・緊張するよ・・・、そうだ、お爺ちゃんがもし緊張したらするとよいつて言つていたのをしてみよっ。』

彼は、そう思つと手のひらの”人”という字を3回書いてそれを飲み込むようにした。

タオ『ふう、これでもう大丈夫。』

と、そう思つていると、突然斜め後ろから声がかかつた。

? ? ? 「ねえ、それなにしてんの？」

タオ『ウワアアツー?』

彼は突然かかつた声に驚いて思わず大声を出してしまつた。

タオ
s i d e

o u t

Part 2 (後書き)

この投稿ペースでいくと2週間に1回のペースになると思っています。

Part 3 (前書き)

こんにちは、エアライドです。只今、テスト期間中でして、勉強の合間に投稿しています。

Part 3

ウォン side

彼に近づくと彼は何やら手のひらに文字ひしきものを書いてそれを飲み込んでいた。その行動を不思議に思ったウォンは彼に声を掛けた。

ウォン「ねえ、それなにしてんの？」

？？？「ウワアアツ！？」

彼はかなり驚いたようで大声を上げた。そんな彼を見たウォンは、『どれだけ緊張してんの、『いいつ』と思つた。

？？？「えつーな、何！？」

彼は軽く混乱してるので大丈夫かなと思いつつ俺は声を掛けてみた。

ウォン「あ、ごめんな。大丈夫か？」

？？？「え？あ、うん。大丈夫だよ。」

と、彼は返事を返しながら俺の方を見つめたが、俺はそんなこと関係なしに話を続ける。

ウォン「本当に『めんな』君がしていた仕草を不思議に思つてつい
・・。」

？？？「僕の方こそ『めん』急に大声出して。緊張しててね、驚いたでしょ？」

ウォン「いや、大丈夫だぜ。こんな大きな会場で（試験が）行われるんだ。緊張しないはずがないよ。現に俺も少し緊張してるしな。それよりも今、手のひらで何かしていただけれどそれ、なんなんだ？」

？？？「あ、これ？これは緊張しなくなるおまじない。ここにくる前にお爺ちゃんに教えてもらつたんだ。仕方は、手のひらに”人”つていう字を3回書いてそれを飲み込むだけ。簡単でしょ？」

ウォン「へー、そんのがあるんだ。で、それで効果はあったの？」

? ? ? 「あー、飲み込んだ直後に声を掛けられたからね . . 。」
(^ ^ : :

ウォン「・・・『めん。』 m(— —) m

? ? ? 「あー、いいもー。それに、君と話していたら緊張なんて吹き飛んじゃった。」

ウォン「そつか、それはよかっただぜ。あ、まだ名前言つてなかつたな。俺はウォン。よろしくな。」

? ? ? 「僕はタオつて言つんだ。」ちりぢりよろしく。

ウォンside out

Part 3 (後書き)

次回は、登場人物設定にしたいと思っています。

登場人物設定（前書き）

2日連続投稿でーす。こんな事している暇では無いのに・・・
— orz

登場人物設定

エアライド「どうも、おはようございます、じんにちは、じんばんは。読者の方々。作者のエアライドです。（以下、作者とします）」

ウォン「やあ！主人公のウォンだ。（以下、ウォン）」

タオ「主人公かもしれないし、ただの脇役かもしれないタオです。」

ウォン「何だよ、それ」（^ ^ ;）

タオ「だって、作者が、そうしているから仕方がないでしょ？」

ウォン「さくしゃ？」（・「—」ジー

作者「いや～、まだ決まらなくて。。。まあまあそんなことよりも、今回は登場人物設定をすることにしたよ。ワード、パチパチパチパチ」

ウォン「。。。」

作者「……乗ってくれよ～」（ＴＯＴ）

タオ「そんな作者はほつておいて「無視された！？」……始めよう」

ウォ「……へへ～」

作者「グスン」（；）

ウォン

主人公 12歳 外見は某学？都市の？条さんで、髪型は、ツンツンヘア－ではない。

春にハンターになつたばかりだが、結構強い。訓練所の教官に勧められて受験した。

使用武器：太刀、ライトボウガン。何時もは太刀。

家族構成：母、妹、祖父、祖母との5人家族。

彼の父親は有名なハンターだったが、数年前、仕事中に未知のモンスターに襲われ殉職。帰らずの人になつてしまつた。未知のモンスターについては、それ以来姿を見た者はいないとのこと。ウォンがハンターに志願したのは父親ね仇をとるため。

そして彼は、今日もあの未知のモンスターを探し続ける。

最後に一つ。実は、彼には、彼以外誰にも知らない不思議な力を持つていた。

ウオ「…………」

タオ「最後のナニ?」

作者「まだ秘密。まあ、出てきたらまた教えるから。
」

タオ「約束だよ!」

ウオ「…………」

タオ「ウォン…………?」

ウオ「…………」

タオ「ウォン!!--」

ウオ「…………ハツ!――」

タオ「ウォン、大丈夫?」

ウオ「嗚呼、大丈夫だ。それより、次、タオのいこうぜ！」

作者「はいはい」

タオ

主人公？脇役？ 12歳 外見は、「牧？物語 や？？ぎの樹」に
でてくるタオっていう人物。髪の毛の形・色が違う以外あまり変わ
らない。

今回受験したのは、彼の祖父によつて強引に。

使用武器：双剣、片手剣

家族構成：父、母、祖父、祖母の5人家族。

彼の祖父は、ハンターだつたがもう引退している。今回タオを強引
に受験させたのはタオに気弱なところを直すため。他にも理由は、
有るみたいだが、一番は、それだ。

以上

タオ「適当！？ちょっと作者！」ヽ(*・`・)ノ

ウオ「まあまあ」

作者「と、こうことで、2人の説明は終わりました。まあ、まだぶん他にも出てくれると思いますか、それは、その都度、していきたいと思います。と、こうことで、今回まではこれで終わります。さよなら。」

タオ「あ、ちよつた」

作者がログアウトしました。

タオ「あーあ、行っちゃった。」

ウオ「たく、作者は・・・・・・・・俺らも終わるか」

タオ「そうだね」

ウオ「と、こうじで次回、お楽しみにー！」

登場人物設定（後書き）

次、何時になるかわかりませんがお楽しみに。

Part 4 (前書き)

作者「しまつたああああああああああ」

ウォン「わあつ！？なんだ？何なんだ？？」

タオービーしたの？」

作者「大切なこと言うのわづすれつてたあああああ！」

ウォンーそれは、何だ?」

作者・・・後書き

タオーなんて！？

Part 4

タオ side

タオ「えつ？な、なに！？」

僕は、突然横から掛かつた声に対応できず混乱してしまった。

？？？「あ、ごめんな。大丈夫か？」

タオ「え、あ、うん。大丈夫だよ。」

また、横から声が掛かつたが今回は反応できて、返事を返すことができた。

？？？「本当にごめんな。君がしていた仕草を不思議に思つて、つい。

タオ『仕草？仕草つてこれのことかな？』「僕の方こそごめん。急に大声出して、緊張しててね、驚いたでしょ？」

？？？「いや、大丈夫だぜ。こんな大きな会場で（試験が）行われ

るんだ。緊張しないはずがないよ。現に俺も少し緊張してるしな。
それよりも今、手のひらで何かしていただけれどそれ、なんなんだ？」

彼は僕がしていたおまじないのことについて聞いてきたので答えた。

タオ「あ、これ？これは緊張しなくなるおまじない。ここにくる前にお爺ちゃんに教えてもらつたんだ。仕方は、手のひらに“人”っていう字を3回書いてそれを飲み込むだけ。簡単でしょ？」

？？？「へー、そんなのがあるんだ。で、それで効果はあったの？」

タオ「あー、飲み込んだ直後に声を掛けられたからね……。」
＾＾；

？？？「……」めん。「——」めん

彼が再度謝ってきたので僕はそれに答えた。

タオ「あー、いいよもづ。それに、君と話していたら緊張なんて吹き飛んじゃつた。」

？？？「そつか、それはよかつたぜ。あ、まだ名前言つてなかつた

な。俺はウォン。よろしくな。」

彼は名前を教えてくれた。僕はそれに返すよつに、

タオ「僕はタオって言つただ。」（うなづいて） よろしく。」と、答えた。

夕才 side out

Part 4 (後書き)

作者「書いつのせひでたのよ、『』が声出してこるので、『』が思考です。」

ウォン・タオ「やるな」とかよー………」

作者「いぬざ。」

Part 5 (前書き)

遅れて申し訳ない

ウォン side

ウォン「タオってゆうのか。よろしくな。そうだ、なあ試験合格したら、俺とペア組まないか。」

ハンターは、1人での行動のソロと複数の人で行動のグループでの行動の2種類がある。（グループは最大4人まで）それらは、どちらを選んでもよい

ウォン『元から1人行動は好きじや無いからな、誰かと組もうと思っていたんだよね。』

返事は直ぐに返ってきた

タオ「え！本当…？なら僕もいいよ。僕一人では寂しかったんだ。」

ウォン『タオ了承してくれたみたいだな。』

ウォン「ありがとな。なら、まずは合格しねえとな。俺も頑張るか

「うん、ありがと。頑張るよ。」

タオ「うん、ありがと。頑張るよ。」

2人は意氣込んだ。

ウォン side out

タオ side

ウォン「タオってゆうのか。よろしくな。そうだ、なあ試験合格したら、俺とペア組まないか。」

『パツパラパー、パパパ、パツパラパー』と、

その言葉を聞いたとたんに頭の中でファンファーレが鳴った。

タオ「え！ 本当！？ なら僕もいいよ。僕一人では寂しかったんだ。」

僕は、すぐさまOKの返事をした。

ウォン「ありがとな。なら、まずは合格しねえとな。俺も頑張るか

らタオも、頑張れよ。」

タオ「うん、ありがとう。頑張るよー」

『張ろう。』
タオ『よし、せつかぐのチャンスだ。僕も試験に落ちないよつに頑

夕才 side out

そして、そんな感じに楽しく会話しながら2人は試験開始を今か今かと待っていた。

—

作品「活動報告にも書きましたが、」の場を借りて再度謝罪致します。

遅れて申し訳ありません、「遅いんじゃ！」のボケ力スがああああああああああ！（ウォン）「ドスッ」（殴った音）グハ

タオ「自業自得だよ」（――）フンッ

作者「あ、タオ貴様、鼻で笑う。『黙れええ』（バコッ）ガハッ」

タオ「で、なんで遅くなつたの？」

ウォン「さあ、白状しろ。」

作者「えーとですね、文化祭があつて展示物を作るために学校に遅くまで残り、終わつたと思ったたら、危険物取扱者の試験で忙しく、それが終わつたと思ったら、期末試験と言う流れになりまして、気がついたら最終投稿から1ヶ月以上経つてたと言うわけです。はい。」

「

タオ「なるほどね。で、危険物、受かつたの？」

作者「あ、はい。ギリギリだけど合格しました。ちなみに△4。」

ウォン・タオ「へーー」

作者「扱い酷い！あ、実は活動報告にも書いたのですが一部修正で不定期投稿なんですけれど、それにスーパーがつきます。つまり超不定期投稿となります。また、危険物試験な他の類を受けるので。

申し訳ないです。アハハハ。」

ウォン「アハハハ・・・・・・・じやねええ！」（バシッ） 鉄製の
ハリセン

作者「ブツ」

タオ「うわ～、痛そ～」

作者「痛そうじやなくて痛いんだよ！仕方なかつたんだ！先生が受けろ、受ける言つからり・・・。」

ウォン・タオ「人のせいにするな！」（ドカツ、バキヤツ） Wタ
イキック

作者「ガツ」・・・チーン（気絶）

タオ「あら～、氣絶しちゃつたね。」

ウォン「たく、世話をやけるぜ。」

タオ「と、作者が氣絶したので今回はこれで終わりです。」

ウォン「次も不定期だから、まあ、待つてやつて下れ。」

ウォン・タオ「じゃ、さよなら」「さいならー！」作者がログアウトしました」って復活早ー？しかも帰った？！」

Part 5 (後書き)

申し訳あつませんでした。

Part 6 (前書き)

作者「前回あんな宣言していながら、結構定期的投稿。」

ウォン「あれ作者？危険物は？」

作者「テキストがきていなから取り組めない。だから、その間に投稿。ご覧ください。」

タオ「どうぞ！」

作者「あ、新人物出ます。」

ウォン「マジー？」

作者「マジ。では、改めてどうぞ。」

お互に自己紹介した二人は開始まで会話しながらまつっていた。
そして、試験開始時刻

？？？「静かに！！これからギルドハンター採用試験を始める。我が輩は、今回、試験監督者の担当に当たった教官だ。」

ウォン「え、教官！？」

彼はまさかの知っている人物の登場に驚いた。

教官「これから貴様等には三つの試験を受けてもらひ。三つとも合格でハンター採用だ！異議は受け付けん！いいな？」

ザワザワザワザワ

「えーまじかよ」「これはもう無理だ」などの声が至る所から聞こえてくる

教官「黙れ！！私語はつつしめ！では、これから第1試験を始める。全員渓流のベースキャンプに移動だ！我が輩について来い。遅れた者はその地点で失格だ！」

タオ「うわ～試験難しそうだね。僕、大丈夫かな。心配になつてき
たよ。」

ウォン「まあ、俺らは今までの成果を見せねばいいんだ。自信もと
うぜ。さあ、俺たちもいくぜ。こんなところで失格になっちゃ洒
落になんねえ」

タオ「うん、こいつ！」

渓流・ベースキャンプ

教官「よし、着いたぞ。では第1試験を開始する。第1試験は貴様等の基礎体力を見るためにランニングをする。貴様等にはこの渓流を一周してもらひ。今から地図を配る。地図に書いてある赤い線が走るコースだ。」

ウォン「なになに、おつ、結構広いな。」

コースはベースキャンプを出て、エリア 1 4 7 9 8 6

2 1 ベースキャンプという順だ。

教官「ちなみに、不正防止の為に各エリアに各エリアの番号を書いた小さな旗を立てておいた。それを取つてくるように。ひとつでもなかつたら失格だ。そういう、合格ラインは5分だ。」

タオ「えつ、い、5分！？無理じゃない？」

「無理だ」 「早すぎだつて」 などが聞こえてくる

教官「・・・本当なら2分なんだがな・・・。」

・・・「え、」・・・

会場が静まり返った。

教官「5分がいやなら2分でもいいぞ?」

受験者全員が首を横に振りながらじつ思つた。

『いや、遠慮します。』

教官「では、試験に入りたいところだが、ひとつ忘れていた事があつた。今回、受験者数が多いので3人1チームで試験を受けてもらうことになった。ちなみに、全試験をだ。チーム分けは、既に此方が行つた。会場に入る時に封筒を渡されただろう。その中にアルファベット1文字書いた紙が入つている。その文字が自分のグループになる。そのグループが後の試験を受けるグループになる。受験者は7~8人だ。今から少し時間を取る。自分以外のメンバーをみつけなさい。それが終わつたら試験を開始する。」

ウォン「チーム性か、えーと、封筒、封筒つと。あつた。これは、

Gだな。タオは？」

タオ「えっとね、あつ、やつたー僕もGだよー！」

「アッシュ」

タオ「うん、本当! 良かった! ウォンと一緒にで。」

ウォン「ああ、よかつたぜ！頑張ろうな！」

タオ「此方こそ！じゃあ、もう1人の人も探そう。」

ウホン「お、ハ...」

ウォン「Gの人いるか!?」

タオ「居たら返事してください！」

あれから2人は残りの1人を探している

ウォン「なかなか見つからねーな」

タオ「うん、ここ結構広いからね」

このベースキャンプは縦、横共に50?もある。

ウォン「広すぎだろ、おーいG持ってる人!!」

すると1人の青年が反応したようで紙をこちらに向けて手を振った。

タオ「あ、あの人の紙に書いてあるのって・・・」

ウォン「ん、おお、Gだ!」

2人は手を振った青年に駆け寄った。

タオ「貴男はGですか?」

??.?「はい、わつです。」

ウォン「やつと見つけた。」

??.?「申し訳ありません。私し端の方にいたので御2方にご迷惑をお掛けしたようだ。」

タオ「いえいえ、そんな事はないですよ。ねえ、ウォン?」

ウォン「ああ、わつだぜ。それに俺らも端の方にいたしな。」

??.?「では、今回はおあこじとこつじでよひこでしょうか?..」

タオ「はい、それでいいです。それよりもあなたの名前は?..」

??.?「おつと、失礼しました。私し、ニアー・・・ニアと申します。よろしくお願いします。」『どうも読者の皆さん、作者のニアライドです。今回これを書いていたら自分も出たくなつたので出でみました。テヘ』

ウォン「ニアか、どつかで聞いたことがあるよつな、ないよつな・。まあいや、俺はウォン、よろしくな。」

タオ「僕は、タオ、よろしく。」

エア「よろしくお願いします。ところで御2方はどちらの関係で?」

ウォン「今日、初めて会って、意気投合してすぐに親しくなったって感じかな。」

タオ「うん、まあ、そんな感じかな。」

エア「そうですか。では、私しもその仲にいれてもうえませんか?」

タオ「いいよ、いいよそれくらい。ねえ、ウォン?」

ウォン「ああ、だだ条件がある。」

タオ「ウォン?」

ウォン「その話し方何とかしてくれ。。。なんか」せばやくなる
から。」

エア「わかりました。では、普通に話すわ。これでいいか?」

ウォン「…………すつげー変わりよつ。まあ、いいぜ。これからうようしな。」

エア「よし、ウォン、タオ!」

教官『んー、よし、いいな。』「では、全員揃つたようなので只今から、第1試験を開始する。全員スタート地点へ。我が輩の掛け声でスタートする。」

ゾロゾロゾロゾロ

教官「並んだな。では、第1試験、位置について、ヨーイ、・・・スタート!!」

ダツダダダダタタタタ

勢いよく全員が走り出した。さて、Gチームは、最後まで生き残れるか。それは次回にこづ「期待!」

Part 6 (後書き)

ウォン・タオ「何してるの作者あああ

ウォン・タオ「出たくなつたので出てみました。

作者「出たくなつたので出てみました。

ウォン「出でました・・・ってあるのなあ。

「

作者「いいじやん、いいじやん。さて、次回は試験中の話です。この

「つい期待!」

Part 7 (前書き)

作者「あけましておめでとうございます。」

ウォン「今年もどうぞ」「異能な狩人」を

タオ「よろしくお願ひします。」

作者「これは、今年初めての投稿です。」

ウォン・タオ「それでは、どうぞ。」

前回同じグループになつたウォンとタオ、そしてエア。

彼らは、今、走っていた。

ウォン「何だよ今のナレーションは！おい、ボケナス（作者）舐めてんのか！#」

エア「黙れや、クソガキ！これから（現実の方）の事でムシャクシヤしてたんだ。それよりも、年上に向かってなんや、その言い方！」

ウォン「つるせー、年上も年下も関係あるか！…というか、毎回話が短けーんだよ！もつと長くしろよ三下！そんなんだから一回、乙4（危険物試験）落ちたんだろうが！」

エア「仕方ないだろ。文才がない俺にとつてこれが限界だ！…ついでうか、今は、乙4は関係ねーだろ！？」

ウォン「そんなの関係ねー。俺が言いたいのは「ねえ、さつきから2人とも五月蠅いよ。」・・・・へ？」

エア「…………」

タオ「ダカラヤ、五月蠅イカラヤ、チョット、O H A N A S
H H シヨウヨ。フフフ」

ウォン「た、タオ……？」

タオ「ね、だからさ、O H A N A S h 「なあタオ、」……」

エア「俺は、言つたよな。ムシャクシャしてるつて。だからさ余計
な口、挟むんじゃねえ。もしもそれを押し切つて入つてくるんなら、
この世界（小説）ごと貴様を消すぞ。」～（ - - # ）～ >
膨大な殺氣を放つく

・・・・・ゾゾワー・・・・・

ウォン・タオ「・・・グツ・・・」この瞬間2人の背中を何かが駆
け抜けた。

エア「フツ、フフフ、ハハハハ」

ウォン・タオ「…………（。 。 ）」

エア「冗談、冗談。する訳ないじゃん。ちょっとからかっただけだよ。な。」

2人『こひ、言いながらぜんぜん冗談に聞こえないのはなぜですか？』

エア「まあ、この話はこのくらいにして、……こんなけ話してもまだエリアフかよ。てか、誰もいねー！？」

ウォン「マジかよ！？もしかしておいてかれた！？」

タオ「えー、それは、拙いよ。早く行こー！」

エア・ウォン「おつー！」

3人は今までよりも速度を上げて駆けていった。

その数秒後、さつきまで3人がいた場所に他の受験者達が団体で走ってきた。

受験者A「なあ、さつきの3人、凄かつたよな。」

受験者B「おう、教官が合図したとたんに凄いスピードで駆けていつたよな。」

受験者A「まさか、もひゴールしてたりして？」

受験者B「まさか」

ハハハハハ

他の受験者達はそう話しながら走つていった。

そう、3人は気づいていないが、彼らは一番前を走つていたのだ。だが彼は、周りに誰もいないことから、自分たちが最下位だと勘違いしてしまつたのだ。ちなみに、これは、開始からたつた30秒後のことだつたりする。

そしてこの事を知らない彼らは、なかなか見つからないためせりんスピードを上げていたりする。

そして、なにも知らないままゴール。そして「ゴールしてから真実を知った彼らは大変驚いた。そして彼らは驚く事に2分で完走してしまつたのだ。

当然、第1試験は合格。第2試験に駒を進める事が出来た。ちなみに教官はそのとき猛ダッシュで走ってきた3人の顔を見て、少し怯んだとのこと。

無事に第2試験に進めな3人。次は何が待っているのか？
それは、次回に乞うご期待！

Part 7 (後書き)

前々から言っていますが、超不定期投稿です。今回は、偶々早かつただけで次回も早いとは限りません。ただ、暇なればできる限り出していきたいので、気長に待っていただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9900w/>

モンスターハンター 《異能な狩人》

2012年1月8日21時54分発行